

第 19 回 英語語法文法セミナー

テーマ 「英語教師のための語法文法」

司会・講師 吉良文孝（日本大学）

講師 小澤賢司（日本大学）

講師 佐藤健児（日本大学）

日 時： 令和 5 年（2023 年）8 月 7 日（月）、13 時 30 分～17 時 30 分

会 場： 関西学院大学梅田キャンパス 1405 室

（大阪市北区茶屋町 19-19 アプローズタワー14 階）

プログラム

13.30～13.40 会長挨拶とセミナー世話役からの全体趣旨説明

13.40～14.25 小澤賢司（日本大学）
「助動詞を使った助言表現」

14.35～15.20 佐藤健児（日本大学）
「英語の未来表現—その意味とかたち—」

15.30～16.15 吉良文孝（日本大学）
「かたちは意味を合図する」

----- 休憩・質問用紙に記入 -----

16.30～17.25 質疑応答

17.30 セミナー終了

参加費（資料代を含む）：2,000 円（当日、受付にてお支払いいただきます）

※本セミナーは、学会会員以外の方を含め広く開かれているものですので、どなたでも自由に参加できます。会場収容人数（80 名）の関係から、参加ご希望の方は英語語法文法学会ホームページにアクセスし、申込フォームに必要事項を記入の上、お申し込みください。申込み締め切りは令和 5 年 7 月 31 日（月）です。先着順で受け付けます。必要な方には「セミナー受講証明書」を発行いたします。

各講師の発表概要

助動詞を使った助言表現

小澤賢司（日本大学）

本セミナーでは、助動詞が用いられた助言表現として、(1) should、(2) had better、(3) may [might] as well の3つを取りあげる。

should と had better に関して、例えば Baker, D. の *An A-Z of Common English Errors for Japanese Learners* (2010²: 115) は、単なる助言を表す際に had better を使用するの是不適切であると説明する (If you go to Paris, you {should / *had better} visit the Eiffel Tower.). これは、had better には「そうしないと困ったことになる」という含意がある (『コーパス・クラウン総合英語』(2022: 132-133)) ことが原因の1つだと思われるが、ではなぜ had better にはそのような含意があるのだろうか。

また、had better と may [might] as well に関して、『総合英語 be』(2022²: 141) は、前者はその行為を促す積極的な理由がある場合に用いられ、後者はその行為を促す積極的な理由がない (消極的にその行為を促す) 場合に用いられると説明するが、なぜ両者にはこのような違いがあるのだろうか。しばしば成句としてその訳語をただ暗記してしまいがちな両表現に対して、表す意味の違いはそれぞれの形式から生じるものであり、その形式を吟味すれば十分に予測可能であることを本セミナーではみていきたい。

英語の未来表現

—その意味とカタチ—

佐藤健児（日本大学）

本セミナーでは、英語の未来表現に見る意味の問題をとりあげる。扱う表現は、(1) will、(2) will be -ing、(3) be about to の3つである。

まず、(1) については、意志未来の will の訳語の問題をとりあげる。意志未来の will には「～するつもり (だ/である)」という訳語があてられることがあるが、この訳語が will の意味を適切に反映しているかどうかを検証する。

次に、(2) については、「自然の成り行き」・「予定」用法の will be -ing をとりあげる。具体的には、(i) 「成り行き」や「予定」の意味は will be -ing という形式とどのようにかかわっているのか、(ii) この用法に進行形の意味は保持されているのか、などの問題について考察する。

最後に、(3) については、近接性の問題をとりあげる。一部の英和辞典や語法書でも指摘されているように、一般には近接未来を表わすとされる be about to も実際には少し離れた未来を表わすことがある。このような言語事実に対して、ここでは、「相対的近接性」および「心理的近接性」という観点からそのメカニズムを説明する。

上記のほか、時間が許せば、未来時に言及する条件文の帰結節における be going to の容認性についても考えてみたい。

かたちは意味を合図する

吉良文孝（日本大学）

今回のセミナーでは、（１）名詞の可算・不可算の別による意味解釈の違い、（２）未来表現としての「be 動詞+to 不定詞」の意味用法をとりあげる。高校・大学等で使用される教科書・テキストを用いて、その意味特徴について検証解説する。

まず、可算名詞と不可算名詞については、その統語上のごく基本的な振る舞いの違いを知ってさえすれば、英語を正確に解釈するための一助になることを確認する。具体的には、D. Bolinger and D. A. Sears の *Aspects of Language* (1981³) の Introduction 部分を大学用テキストにしたものを用い、辞書などの記述も交えながら、検証する。

次に、未来表現 be to について考える。Bolinger の「意味とかたちの一対一の対応関係」の立場からすれば、be to は「かたち」が1つなのだから「意味」も1つということになるが、be to は「予定」「運命」「義務」などさまざまな意味を表わす。この辺りの事情はどのように考えればよいのか。また、be to が if 節内で用いられる場合には、その源を同じくする仮定法用法としての if ... were(was) to、いわゆる、「万一の should」、そして、（動詞そのものを過去形にした）仮定法過去との違いなどを高校の教科書『SPECTRUM English Reading』（桐原書店）を用いて検証する。実際に教科書（抜粋）を用いるので、このほかにも「かたちが意味を合図」しているような箇所についても、時間の許す限り、触れてみたい。